



学会記事

日本湿地学会第13回大会報告

1. 概要

2021年度の学術大会（第13回大会）は、第12回大会で延期となった福島県（尾瀬）での開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンラインにて開催し、尾瀬周辺で行う予定であったエクスカージョンの開催を中止した。開催日程は2021年9月11日（土）の1日とし、大会実行委員会を学会事務局と福島県檜枝岐村に置いた。大会参加は、WEB会議システム（ZOOM Meeting）で参加する方式を採用し、学会員に限り大会参加費を無料とした。参加者は、招待講演者を除いて計56名であった。学術報告では、会議システム上での口頭発表会場と複数の小会場（ZOOM ブレイクアウトルーム機能）で構成したポスター発表会場を設置した。質疑は、質問者が口頭で質問する形式を用いた。学術報告では、口頭発表は10題、ポスター発表5題の報告があった。そのほか、ラムサール条約50周年と開催予定地であった尾瀬の保全に関する2つの特別セッション「ラムサール条約50周年と日本における取組の発展」、「尾瀬の保全とワイズユース～村の人々の暮らしとのかかわりで～」が開催され、活発な討議と意見交換が行われた。第14回大会は、2022年9月3日（土）～4日（日）に北海道釧路市内で開催される。

2. 学会発表賞

本大会より設置された表彰選考委員会により学会発表賞の選考が行われ、以下3題の研究発表が表彰を受けた。

「なぜ尾瀬にはインバウンド（訪日外国人・訪日旅行）が少ないのか～外国人モニターたちの評価～」

○尾崎友紀（インテムコンサルティング）・中村玲子（ラムサールセンター）

「近赤外・熱赤外カメラ空撮による湿原再生地の植生・環境モニタリング」

○田中爽太（北海道大学大学院農学院）・山田浩之（北海道大学大学院農学研究院）・矢部和夫（札幌市立大学）

「オオミズゴケの葉色と光合成速度の季節変化」

○板橋大翔（明治大学）・矢崎友嗣（明治大学）・星良和（東海大学）

3. 発表プログラム

■口頭発表

1. 檜枝岐村における「湿地の文化」について

○平野信之（ラムサール条約登録湿地関係市町村会議・檜枝岐村）

2. 海苔の歴史がつなぐ過去と未来－大森 海苔のふるさと館の取組み－

○小山文大（大森 海苔のふるさと館）

3. “なぜ尾瀬にはインバウンド（訪日外国人・訪日旅行）が少ないのか～外国人モニターたちの評価～”

○尾崎友紀（インテムコンサルティング）・中村玲子（ラムサールセンター）

4. 「湿地学」の基礎としてのラムサール条約および締約国会議決議の基礎的理解と「ラムサール検定」の構想

○笹川孝一（法政大学）

5. 湧水湿地の地下水位変動に関する予察的考察

○富田啓介（愛知学院大学）・高田雅之（法政大学）

6. オーストラリアの内陸湿地における動物プランクトン種の多様性と保全

○小林 剛（NSW州 企画・産業・環境省）・ジャンミラー（カンバーランド動植物相インタープリターサービス）

・ラッセル シール（アデレード大学）

・ヘンドリック セガース（王立ベルギー自然科学研究所）

・サイモンハンター（NSW州 企画・産業・環境省）

7. 近赤外・熱赤外カメラ空撮による湿原再生地の植生・環境モニタリング

○田中爽太（北海道大学大学院農学院）・山田浩之（北海道大学大学院農学研究院）

・矢部和夫（札幌市立大学）

8. オオミズゴケの葉色と光合成速度の季節変化

○板橋大翔（明治大学）・矢崎友嗣（明治大学）・星良和（東海大学）

9. 水位、水温、日長条件がオオミズゴケの冬の成長に及ぼす影響

○森 玲雄（明治大学）・板橋大翔（明治大学）・矢崎友嗣（明治大学）

10. 日本各地の湿地における植物リターや泥炭の分解に及ぼす熱水環境の影響

○中山勇輝（明治大学）・板橋大翔（明治大学）・矢崎友嗣（明治大学）・星 良和（東海大学）・矢部和夫（札幌市立大学）

■ポスター発表

1. 市民調査の副産物を活用した多摩川堤防植生の解析

○紀 正（明治大学）・倉本 宣（明治大学）・山道省三（西暦 2020 年の多摩川を記録する運動実行委員会）・堺 かなえ（西暦 2020 年の多摩川を記録する運動実行委員会）

2. 釧路湿原温根内地区におけるハンノキ林の生長・衰退状況（事前基礎調査）

○新庄久尚（北方草地・草原研究所）

3. 市民参加型調査による河川敷利用実態の解析：多摩川 2020 年運動調査データを用いた解析

○WU Ximei（明治大学大学院農学研究科）・倉本 宣（明治大学農学部）・山道省三（西暦 2020 年の多摩川を記録する運動実行委員会）・堺 かなえ（西暦 2020 年の多摩川を記録する運動実行委員会）

4. 尾瀬ヶ原湿原の地下水流動解析

○藤村善安（日本工営（株）中央研究所）・草間俊樹（日本工営（株）中央研究所）

5. 小川川におけるクサヨシの部分的刈り取りによる種数の変化

○櫻井善文（（株）ドーコン）・矢部和夫（札幌市立大学）・椎野亜紀夫（札幌市立大学）

■大会実行委員会

実行委員長：矢部和夫（学会長，札幌市立大学）・星 明彦（桜枝岐村長）

実行委員：大畑孝二（日本野鳥の会），富田啓介（愛知学院大学），小山文大（理事，大森海苔のふるさと館），山田浩之（理事，北海道大学），田開寛太郎（理事，松本大学），石山雄貴（理事，鳥取大学），笹川孝一（理事兼事務局長，法政大学），佐々木美貴（事務局次長，日本国際湿地保全連合）

監査：太田貴大（理事，長崎大学大学院）

2021 年度理事会報告

1. 概要

2021 年度の理事会は，ZOOM を用いたオンライン会議で，2021 年 5 月 23 日，6 月 13 日，8 月 29 日，11 月 25 日，2022 年 1 月 27 日，3 月 24 日に行われ，主に学会賞（発表賞および論文集）の設置，第 13 回および第 14 回大会の運営，湿地ハンドブックの編集等が審議された。

2. 新しい研究部会の承認

2021 年 8 月 29 日の理事会において，「ため池部会」，「湿地の文化，地域・自治体づくりと CEPA・教育部会」，「北海道湿地コンソーシアム（Hokkaido Wetland Consortium）」に続く 4 番目の部会として「湿地サービス産業研究：湿地と企業ビジネスとの共生に向けて」が承認された。

■テーマ・趣旨

「湿地サービス産業」とは，湿地を取り巻く地域の活性化に向けた「関係人口」の創出・拡大のため，湿地空間を健康，観光，教育等の多様な分野で活用する新たなサービス産業と定義する。湿地は一次産業において持続的な利用がなされているものの，サービス産業が含まれる第三次産業での利用実態や将来のポテンシャルが十分に研究されていない。

本部会では，国内外の既存優良事例の調査や多面的な視点での分析を通じて，企業ビジネスと湿地との共生の在り方を明らかにする。また，湿地空間を活用したビジネスプランを提案するための基礎的情報を整備する。

■構成員

太田貴大（部会代表，長崎大学），新井雄喜（松山大学），高田雅之（法政大学），田開寛太郎（松本大学），藤村善安（日本工営（株）中央研究所）

3. 理事の交代

2022 年 1 月 27 日の理事会において，小山文大理事（大森海苔のふるさと館）から芝原達也理事（（株）生態計画研究所）への交代が承認された。

（湿地学会事務局）